



長谷川勝士の

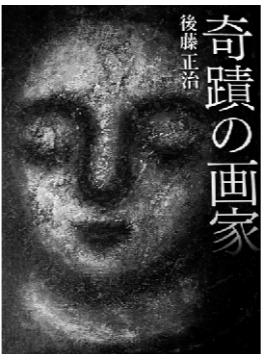
# 元気

## もらっっちゃオ!

はせがわかし  
●1950年生まれ・姫路市出身・鍼灸師・日本鍼灸師会会員・駒沢女子大学非常勤講師。

### 第17回 偶然と奇跡でこの世界はできてくる

奇蹟の画家、と呼ばれる石井一男さんは神戸に住んでいる。その絵はルオーの印象を与えるが、まったくの我流で描いている。その作品に触れた多くの人は涙を流し感動するところ。



「奇蹟の画家」  
画家・石井一男さんは題材を決めず塗っていく。「内側から呼んでくれるもの」を描き続ける。

余命短いガン患者と白血病で死の淵に

### 今日の話題 朝ごはんを食べないとバカになる

ちゃんと朝ごはんを食べないと大切なこと。理屈ではわかっているけど忙しい時や休みの日には、つい抜いてしまいがち。

しかし、朝ごはんを食べないと脳に必要な栄養が届かず、仕事中でもアタマがぼーっとしてしまう。また、寝ている間に下がった体温を上昇させ、元気に活動することが困難になります。



パンに納豆のせて食べるあせいなん

骨の基礎は20歳までにできあがってしまいます。年齢をかさねてから、あわててカルシウムを摂っても十分ではありません。子供の時にしっかりと栄養を摂ることが大切。朝ごはんは一日のスタートの土台です。しっかりと摂っておけば生活習慣病の予防にもなります。

栄養ポイントは「緑黄赤」をバランスよく摂ること。「緑」はキャベツ、ほうれん草など。身体の調子を整えます。「黄」は芋、豆など。エネルギーとなります。「赤」は肉やチーズなど。身体の血や肉、骨になります。

この3つのグループを上手に摂り、仕事に勉強に頑張れば「五月病」など怖くありません。

立たされた人が「最後の一枚」として病室に置いたのが石井一男さんの絵だ。

ノンフィクション作家の後藤正治さんの『奇蹟の画家』で紹介され、一躍有名になった67歳の石井さんだが、棟割り長屋に一人て住む生活は変わらない。純粋な心で描かれた絵は、人々の魂を揺さぶる。

### 宝物のドラマみたいな出会い

私の友人の話であるが、ウソみたいな、まるで宝物のドラマみたいな恋愛結婚をした男の話である。

その日、寝過ごした彼はあせっていた。重要な会議があるのだ。いつもの駅に小走りに向かった。電車がホームに滑り込

「コシを年寄り扱いするな」

そりやないだろう。で、私は「はっきりしない場合、次の駅で席をたち、降りる振りをして別の車両に乗り換えるのだ。そこまではいい。私は、するのだ。

この前、めっちゃくちゃ困った。目の前に登山服を着た老人が立った。そりやねえよ。迷っただろ！

### 地球は奇跡でできてる

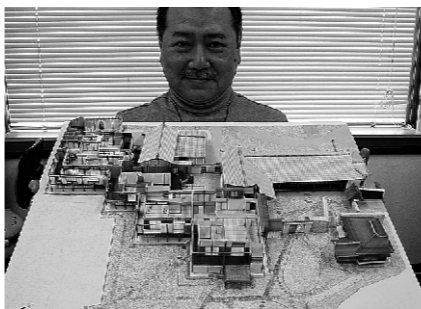
ひとつの石が惑星の未来を変えることもある。1980年に提唱された「巨大隕石衝突説」がよく知られている。恐竜を絶滅させたと言われる隕石の衝突について、12カ国の共同研究チームが「間違いない」と結論付けた。

6550万年前、直径10キロの隕石がメキシコ東部にぶつかった。その衝突はマグニチュード11の大地震となり、高さ300メートルの大津波が発生し、大気中に飛び散った粉塵が太陽の光を遮断し、寒さと食糧不足を生み、恐竜をはじめ多くの動植物が絶えた。このイキモノが死滅した世界に、小動物だけが生き延び、やがて進化の過程で人類が誕生する。

なんか、すげえスケールのデカイことをこんなに簡単に書いてちゃっていいのじゃない。

んできた。彼は階段を駆け降りギリギリで飛び乗った。だが、コートはドアに挟まれた。必死で引っぱるのだがなかなか取れない。電車の中は空いていた。彼はドアにもたれて眠ったふりをした。次の駅でドアが開いたらさびりげなく、そう、何ごともなかったかのようふるまおう、そう決めた。

で、なんとなく反対側のドアを見た。座れる座席はあるのにオンナがドアにもたれて立っていた。「おやっ」と思ったが、まさかね。でも、一応、オンナのコーンをじっくり見た。ドアに挟まれていた。次の駅でこのドアが開いたかは覚えていないと言っ。記憶にあるのは、自分の降りる駅もすつとほした。そのオンナと楽しく話し込んでしまったんだそっだ。



奇蹟のペーパークラフト「桂離宮」。日本を代表する建築美で縮尺100分の1の見事さ。実際に見ることができない内部まで閲覧できる。

こんな奇蹟の星から、日本人女性飛行士が宇宙へ飛び立った。山崎直子さん。「日本人初のお母さん飛行士」だ。んで、関係ないけど、この山崎直子さんの旦那さん、ちょっと長髪すぎないっ。

### 二十万六千分の1のチャンス

奇蹟といえば、志賀直哉の『盲亀浮木』(せがきぶこ)を思い出す。

百年に一度しか海面に顔を出さない亀と、果てしなく広い海を漂う浮木。この亀が百年目に海面に首を出すと、なんと偶然にも、浮木に一つだけあいた穴にスッポリ入っちゃった、というお話。ありえないことも、この世界では起こりうるという寓話。『盲亀浮木』は偶然を超越し、日常の奇蹟を描いたすごい作品だ。

作者(志賀直哉)は家で飼っていた犬の失踪に気づく。「クマ」という名の、白と茶の毛の犬だ。ある日、鎖をはずした途端、走り出し、行方不明となる。

一週間が過ぎようとしていた。作者は息子と娘を連れてバスに乗る。十字路に差しかかった時だった。作者の目にクマとそっくりの犬が映る。娘は「クマだ。クマだ」と叫ぶ。確かに作者も見た。あわててバスを降り追いかける。犬はおかまひなしに走っていく。「どこで見逃せば、再

### 偶然と呼ぶのが奇蹟なのか

私たち友人は、彼の出会いを「ただの偶然」と呼ぶ。だが、彼は「奇蹟の出会い」だと言っ。どっちでもいいのだが。

こっいつた、例えば電車みたいな狭い空間でも、「偶然」によく遭遇する。私は電車に乗っても必死になって座ろうとはしない。なぜなら、座っていて口くなことないからだ。

私が座るとたいいてい、目の前に妊婦さんやお年寄りが立つ。当然なことだが、私は席を譲る。困るのは、はっきりと妊婦さんだとわからない女性や、はっきりとお年寄りに見えない方がいたときだ。トラウマとして、ある場面に遭遇したことがある。学生らしい男性が、お年寄りに席を譲ろうとしたとき、そのお年寄りが怒鳴った。



ペーパークラフト「桂離宮」は320パーツ。実は作ったのは「くらパソコン教室」のゴシナカ先生。自宅で娘さん2人に「さわるな!」と怒鳴りつつ1カ月で完成させた。

### 偶然と奇蹟が世界をつくる

作者がクマに気づいて、娘が「クマだ」と叫ぶまで、約3秒。十字路での3秒は「一瞬」であり「瞬間」であり、「偶然」を超えた「奇蹟」だろう。

これを数学してみると、一日が八万六千四百秒。発見までの一週間で六十万四千八百秒。それを3秒で割ってみると二十万六千六百。ふひひ、二十万六千六百分の1の確率なのだ。

予期せぬことは起こるものなのだ。恋愛もそうかもしれない。例の電車に挟まれた男は、電車に挟まれたオンナと結婚した。

私たち悪友は、「奇蹟」を信じる彼に次のようなイギリスの諺を贈った。「恋愛は、より多く愛したほうが敗北する。」